HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	芒亭書屋談叢
Author(s)	芒亭
Citation	各務時報, 110
Issue Date	1941-01-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/77292
Type	article
File Information	A018_02_03all_Part40.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

芒亭書屋談叢

私は時折鄉愁に襲はれた樣に古典趣味と云つた樣な情緒にひたりたくなる事がある。秋から冬にかけてそれは特に多い樣である。初秋の午後障子を開け放ち虫の音のあはれを聞き入りながら平素餘り用ひない硯と筆を取り出して色紙や短冊にはしたない歌や繪を書いて興ずる事がある。良い歌を作る爲や良い繪を描く爲にと云ふのではなくて、唯々其氣持にひたりて喜ぶのである。筆をとりて終ひに歌も繪も成らぬ事が屢々ある。虫の音に聞き入りつゝ墨すりながら歌をものせんと心を澄ます己れの心に陶醉して半日を過す事があるこんな心は正しく古典日本人の心の一つの面に違ひない。世俗と現時にかき亂されて居る自分の魂が、魂の故里に歸りたい氣持ちである。それは民族的な魂のノスタルヂアだと云へるであらう。

晩秋初冬の頃ともなれば、埋み火の火鉢にあたりながら燈火の下に夜の更くるを知らず日本の古典を讀書して魂の故里に遊びひたる事もある。かゝる場合に取り出す書は、平安鎌倉の頃の物語の類もあれば、室町時代の謠曲集や狂言集の類もあり、江戸時代の句集や俳論の類もある。これ等のもの何れか興なきはないが、古き世の日本人の日記文や紀行文は私の最も好むところである。

一生かゝつても讀み切れない程多くの自國の古典を持つて居る日本人と生れた事は幸である。優れた多くの作品がある事も幸であるが、然し何よりも嬉しいのは亡き父や祖父の日記を讀む樣な心安さをそこに感ずる事が出來る事である。夜が更けた初冬の夜古書をさし置いて埋み火をあせりながら平安の昔を靜かに想ひひたる時泰樂これにまさるものはない樣に思ふ。

古典學者の云ふ所謂古典は內容及び時代を嚴格に限定し中には古典を古事記、日本書紀、萬葉集、風土記の範圍に止めて居る學者もあるが、私がこゝで云ふ古典は古典と云ふ語を最も廣く解して過去の日本人に依つて編述された權威ある一切の典籍を意味して居る。かくの如き意味での古典は萬般の方面に關し寔に汗牛充棟である。それ前のものは現在の科學的研究や藝術的敎養に直接有益なる示唆を與へる事は少ないかも知れぬが、それによつて我々の父祖の業績を靜かに考覈して見る時、無限の慰めと鞭撻を感ずる事が出來る。

日本文化の成長史の上に己れと現在を置いて眺める事が出來るからである。私等は小學校の時代から近世の歐米で出來た科學や藝術を多く學び、その優秀さも充分に知つて居るが、私等が歐米の文化に對する時は、學ばんとする態度、味はんとする態度、良きは取りて惡しきは斥けんとする態度を持するので、勢ひ我と對立する彼を常に意識するのであるが、私等が日本の古典に對する時は己れに歸る心安さがある。良くても惡しくてもそれは己れ自身の姿である。

更けた冬の夜の埋み火の上には平安時代の己れの姿が髣髴として現はれて來る。

(芒亭)